

# ~~ズッタ~~ 論文レポート

Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical basis of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1(1), 1-47.

政策・メディア研究科 修士1年 遠藤 忍 (81124262 / enshino@sfc.keio.ac.jp)

## 著者の紹介

Michael CanaleとMerrill Swainによる共著論文。これが執筆された当時、両者はカナダ・トロント大学のオンタリオ教育学研究所に所属していた。第二言語教育、とりわけカナダにおけるイマージョン等のバイリンガル教育の教員養成に従事していた研究者である。

## 本論文の主題

本論文は、執筆された当時までに多くの研究者が残した業績をまとめたレビュー論文であり、一貫して「コミュニケーション能力(Communicative Competence)」の定義について述べている。この試みが他の学者と異なっていたのは、Communicative Competenceを、言語の使用者の分析という視点から、外国語の教育とテスト(評価)という視点に発展させて論考させている部分である。緻密な論理構成の元に、1) 文法能力(知識)、2) 社会言語能力、3) 方略的能力の3つの定義を示しており、これらと教室における指導・評価を絡めて述べている。

## 本論文の構成と各章の概説

### 1章 背景

研究の考察のまえに、文法アプローチ(文法シラバス)、コミュニカティブアプローチ(概念/機能シラバス)、および両者の中間と位置づけられる状況シラバスについて考察している。また、Chomskyの唱えた能力と運用の違いについて考察しながら、同時に社会言語学者たちが述べている「コミュニケーション能力」を引用して、言語知識とコミュニケーション能力の違いに関して理論展開をしている。

### 2章 理論モデルの検討と研究レビュー

この章では、3つの項に分けて、理論モデルと研究レビューを行っている。まず、SavignonやVan Ekらの実践研究等を引き合いに、基礎的なコミュニケーションスキルに関する考察を行っている(2.1)。次に、HymesやHallidayの理論を参照しながら、社会言語学の立場のコミュニケーション能力について考察している(2.2)。そして、Munbyらの研究を元に、文法的側面・社会文化的側面などを統合した理論(たとえば結索性など)の考察をしている(2.3)。最後に、それらのまとめとして、当時の諸研究の限界性を示している(2.4)。

### 3章 適切なコミュニケーション能力の理論に向けて

この章において、いよいよ筆者の定義するコミュニケーション能力に関する記述が登場する。最初の項において、コミュニカティブアプローチを発展させるための5つの指針を示し、この最初の指針において、1) 文法能力(知識)、2) 社会言語能力、3) 方略的能力を提示している(3.1)。続く3.2の項では、3つの能力に関する理論構成的構成を提示している。また、3.3と3.4では、それぞれ教授法に対する示唆とテスト・評価に対する示唆を提示している。

### 4章 研究への指針

最後の章では、今後の研究に対するディレクションとして、9つのポイントを示し、また研究の限界性について述べている。

## 本論文の位置づけと評価

この論文は、日本の英語教育におけるコミュニケーション能力の議論において援用されている代表的な理論であり、また多くの概説書でも取り扱われている定義である。事実、私もこの理論だけなら概説書で読んで知っていた。しかし、それが私の中で幾つかの誤解を生んでおり、原典に当たることでそれらが誤解であったことがよく理解できた。言い換えれば、この論文における理論の核は3つの定義(文法、社会言語、方略)であるが、これだけを取り出してしまうと、本来著者が示したかった理論背景を無視することになる危険性がある、ということになる。

本書が画期的であったといえるのは、当時のコミュニカティブアプローチが意味伝達を中心としており、また社会言語学が構造主義の反動から社会文化的側面に目を向けることに傾倒したと言える状態の中で、コミュニケーション能力の内容に文法能力を含めた点である。また、本論文が示すコミュニケーション能力とその3つの定義は上下関係(包含関係)にあるのではなく、並列の関係にあることを示したことも画期的であったと言える。これまで私自身が、この3つの定義を優劣を付けて判断していたことを反省しつつ、3つの定義を統合的な者として判断する必要があることが分かった。

いずれにせよ、外国語教育に従事する者としては、この定義を知っておくことで、その3つの定義が示す能力をバランスよく養う授業設計が出来るようになることが期待される。